

貞丈雜記

十五

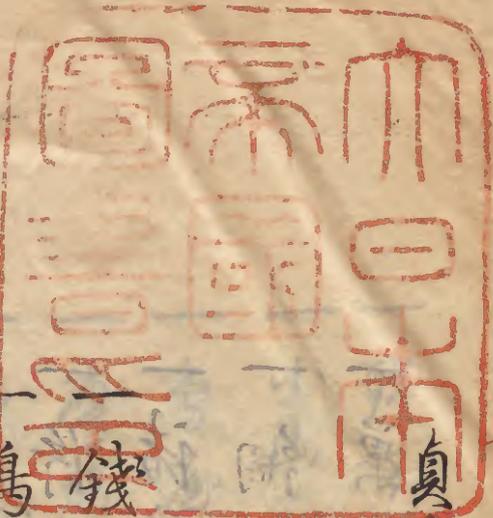
本松  
生田

和書門	
二五〇八七	類
七三函	
二架	
一六冊	

內閣文庫	
和書	類
二五〇八七	號
二函	冊
三架	

內閣文庫	
番號	和 25087
冊數	15 (14)
函號	212 19





真丈雜記卷之十五

鳥目類之部目錄

錢の事

鳥目歳正と云事 三ヶ条

大判小判金銀の事 四ヶ条

古の物の價の事

永淺の事

知行何石の事

料足要脚の事

古ハ金銀通同の事

浅淺の事

丁取の事

菊簾の事 二ヶ条



雜記十五

目一



鳥の首結る馬

鷹一連と云る

みよりしと云る

鷹を束と云る

鷹の赤板馬

鷹のせき籠

軍陣架と云る

軍陣の巻籠と云る

奉神籠と云る

うきき取結る馬

禁野と云る

こころ称めと云る

鷹の尾の名目

鷹の法衣後

別是の云る

葬送の架と云る

軍陣の巻籠と云る

奉神籠と云る

物数之部 雨報

祝儀七五三の敷用と云る

折付合と云る

桃子をハ一枝と云る

禮一領と云る

鮎一丈 ニヶ条

袴を込めと云る

おの寸法を定と云る

弦一條

葦目一腰

神道八の敷と云る

一具と云る

鞆一口 轡一口

曹一劔

馬小正と云る

大のバツ

酒二献 三献

きは不<sub>レ</sub>ツヨ

矢二<sub>レ</sub>物を一<sub>レ</sub>と云る

保侶をハ一領と云

涉後藤一合と云

抛子信事 *tsuriko no shi*

彦祖の事 *hikohito no koto*

簾の事 *shiranu no koto*

輿一丁殿の事 *ko no koto*

綿袋地と云 *wanfukuro no koto*

扇風 *sensu no koto*

言語の事 *kotoba no koto*

言語の事

巻敷の事 *makishi no koto*

香の敷の事 *ka no shiki no koto*

小袖の事 *kosode no koto*

志の事 *ishi no koto*

墨脈の事 *sumi no koto*

布納の事 *nunao no koto*

晝夜の時敷の事 *hiru yoru no toki shiki no koto*

具の事 *gu no koto*

軒窓の事 *tenmadara no koto*

殿之字の事

何寺何院何軒等 *nanami no koto*

貝おむひ *kaio muhi*

籠有と云 *karu aru to iu*

とのゐる事 *tono oiru no koto*

清ういひの事 *kiyoi uhi no koto*

弓射の事 *yumi no koto*

あねこおぢこおむこ *aneko ojiko omuko*

伯叔父母 *chichibu*

物忌物騒 *mononoshi mononaka*

枕之字の事

飲樂と云 *kanryaku to iu*

貴人食物の事 *kijin shokumotsu no koto*

かこまる *kakomaru*

上日 *uwatsuki*

酒をこん縁をかん *saake o koniwaki o kan*

あにきと云 *aniki to iu*

おやぢやん *ochijyan*

都合期 *tsuguhiki*

仕合悪 *shigawaru*

無効祢

尋常

故實と云ふ

花飾といふ

頓て穂々の字

花をおとす

彦意を指す

祢唯と云ふ

おこのまの

涉の字

比真と云ふ

ものあつと云ふ

念と云ふ

式と云ふ

婦と云ふ

新事新級

光と云ふ

老と云ふ

行の字

彦武家供と云ふ

ござんあれ

料理と云ふ

柞留と云ふ

ワハこと

支換

於時と云ふ

多賀

そげへる小舎人

陳と云ふ

何と云ふ

雜記十五

おふとあふ

物惜と云ふ

古書と云ふ

申次

叙用

行用

されこと

瀧の津

あやと云ふ

おふと云ふ

目五

いづこ  
けり  
兼  
けり

面目  
いづこ  
いづこ  
いづこ

見系

いづこ  
いづこ  
いづこ

魚外

汁舎

いづこ  
いづこ

いづこ  
いづこ  
いづこ

いづこ  
いづこ

真かき  
いづこ  
いづこ

いづこ  
いづこ  
いづこ

院興持

経管

如法

無心

杞のさしおの

候  
いづこ  
いづこ

いづこ  
いづこ  
いづこ

いづこ  
いづこ  
いづこ

一 庭弱と云詞

一 馬鹿者

一 尾翁と云詞

一 陰莖

一 入眼と云詞

一 舌を嗅く

一 思ひきこえ孫か

一 機嫌と云詞

以上

雑記十五

一 失礼

一 ゆめく つらく

一 屁むり

一 安否を問ふ詞

一 濫吹

一 たまふと云詞

一 意樂と云詞

目六

鳥目類之部  
金銀類此部ニ兼入  
錢乃才を多目とも鷲目とも鵝眼とも云ふ錢の類  
錢といふ字の目字似る者眼ハ目と云ふ字ハ  
目と同じ又喜相と云ふ錢の相を作ると云ふハ  
青くあるあり

伊勢真友  
千賀春城  
岡田光大  
同  
校

貞丈雜記卷之十五

鳥目類之部

金銀類此部ニ兼入

錢乃才を多目とも鷲目とも鵝眼とも云ふ錢の類  
錢といふ字の目字似る者眼ハ目と云ふ字ハ  
目と同じ又喜相と云ふ錢の相を作ると云ふハ  
青くあるあり

云事料ハ物の代おの心之要ハかあめとすことハ物  
おくてハあはぬむ之是も脚もあしとよむ字残の  
世とを名づりありくる是あらうことハ依る  
是要脚あらし

鳥目共貫文を百疋といひ百文を十疋といふる獲念  
將軍の時代北條相模入道言時我すくしと拾との  
奢をききためたる中ハ犬を多く集めかき合せてたの  
し一みとす依る近國より討て犬を求る不同の事  
まれば後ハ近國ハ犬もあくありとありて犬の代は残を  
出されて遠國より犬を引寄せたることハ犬の代は出させたる  
鳥目共貫文を百疋といひ百文を十疋といふる獲念

後犬一疋の代十文と出す十疋の代百文百疋の代を貫文と  
残を初疋と云ふ是より始り

一 残を貫文を百疋といひ百文を拾疋と云ふ事異種残

一 是書ハ室町殿の時代は別依く本殿の  
亦臣中村を承りありし記に書く 料是十疋廿疋といひ

此犬追おの時河原者犬をもあつる百疋をあつる貫文と  
五疋疋をあつる五百文と云ふ犬一疋ハ拾残はあつるのハ十残  
を一疋といひ百文を十疋といひ貫文犬追おより仰ることを  
一 各同数疋と云ふおの記をぬく或ハ字付入道犬を集めし  
より起りとも云ふハ犬追おより始りとも云ふ抄をよみと云

孝三十三延應二年 庚子 九月廿日 庚寅 乃記文と云抄家

人等の中任官之輩不勤行役事依有其恐召進用途  
 之由今日有評定所謂左右衛門尉分人別百疋左右兵衛尉  
 分人別七十疋左右近衛將監分人別三十疋内舍人分人別廿疋等  
 也不供奉行事等者為每年後可進階云けふの藤倉也  
中ヨリ官位ヲ申シ受ケナカラ鎌倉ニ住居シテ禁中ノ御用ニ役  
 ヲ勤サルハ恐レアルニ依テ其代ニ用途ヲ禁裏工獻ルヘキ旨定ラレ  
 タル也其官ニ依テ用途ノ多少本文ノ如シ用途ハ役義ヲ勤サル代リ鳥目ヲ出ス役錢也  
 古ハ金子小判小粒亦  
 ハ無ク用途と云ハ用脚と云又同一多目のもてけ付既ハ  
 百匹三十匹ホの極あり延應の年号ハ方阿入道の代より  
 ハ七十年程以前之毛を以て考ルハ昔目歳疋と云ふもの  
 當時の犬のりすの起るふハあはれはあはれなりといひける

身ノ奇異雜談の説大進物より始ると云を正しとす  
 一古ハ物の代あり進物も昔目ハ方阿入道の代より  
 あり云は古ハありし極銀も今の町銀ハありしと  
 金ハ砂金として金山より金を取り出し白きるまはるき  
 てあるを石を砕くとき水を入りて砂をゆりまて金ハ  
 かりをふるまていま吹くときすくはまのぬくあるを  
 袋に入れて進物ありとて旧記ハ砂金何れも云ハ秤の量  
 目也大館より秘傳抄ハ金子二十兩とあり書札系ホ  
 黄金五十兩銀百兩と在る予と考ふ所ハ但不苦死  
 道照愚系ト云禁裏極進物と云一うどの町ハ銀

一腰砂金十両は目録ハ八兩違勿論之苗可砂金より  
あり苗金令として納め目録ハ八兩金と云致調違  
き是等の目録は黄金又金子ありあるハ令の大判  
小判のりありあり板金等一令を切て違おするを  
三兩ありは種の見板金と云ハ令を切つたハ益  
のさりとて丸くして板の厚よりすく歩の厚りたるを  
辨別せよと招きひらうのり五枚十枚百枚と云ハ一  
枚又ハ令の益ありたにきくは板を切ハ又只一枚二枚  
も厚ありはは板をきりて包をあけはりありあり  
追可寫よりお書きと云ハ令と云ハ折あり

一とも云金もとも銀もとも火もともして細き針の箇  
一流一こ二竿の如くしたるを八兩銀と切つて  
違物ありとも古の砂金も黄金も常の違物  
ハ一ハ一ハ一のさくはハ一ハ一ハ一のさくも  
残はるるも不足あり板金は出で残をハ割は  
お残はるるも不足あり板金は出で残をハ割は  
より付るるハあり一ハ令銀もありハ天正年中の以  
より出来一ハ武田信玄甲州を通用せよと甲州  
判と云金あり一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一ハ一  
たるおしともたまに持付する者あり

東照權現宮の所代慶長年中より佐渡の金山を初  
徳國より金山出采りて各邦母なるあり大東少尉  
小松の好も年々増えしと天下の財寶を  
かゝぬ指を成し古の金銀少りし故を以て  
の代物なるを以て通用するはあつたを以て  
并通用しとす

大判小判小粒の差を元年より始りて是を慶長  
金と云ふ丁銀も同くは始り

いへり四十六代孝謙天皇代天平勝寶元年  
陸奥國より始り金を造上り

銀の四十四代天武天皇代白鳳三年三月對馬國より

始り銀を造上り  
いへり金の陸奥國小田と云ふ所より造り万葉集  
に家持の歌に因意のは代さうえんとあつたは  
のく山はにりて花とくともありこの年造上り  
るは今の銀ありしは金山のなりしと云ひ  
小島ありしとありは此の金山の太刀かす  
のなりしとありし物の代物は通用するはありし  
は後漢といふ事旧記より  
就徳弱小名回彼御過分莫大に後漢天後

名由トハ夕田  
ト云事也昔ハ

東照権現宮  
金山  
小松  
大東少尉

祠へ天役トハ  
禁裏ノ御用ノ  
役ヲノケル也

東鑑卷三十四  
云浙襖大嘗會  
ノ用途事毎田  
地一段可進濟  
錢二百文之由宜  
下セラレ  
季瓊日録永享  
九年九月十八日  
當院勝定院領  
殿錢免除之

滋之次身之とあり義教公沛元服記は所身位殿後  
事と何々殿ハ院町の院あり恒も所も田の評數之古  
ハ二十歩を一段とす日本紀孝徳天皇の記に云く  
一步ハ坪之六尺五寸四方也 後世ハ三  
百歩を一段とす一段とハ一反と云へ恒後と  
ハ院一段ハ分て幾何恒と云り所ハ多きを云へ  
言刻ハ田一歩ハ親元日記ハ云蝶川野舊田  
の日記あり寛正六年八  
月ノ記ハ云後小松院三十三年忌沛佛事料禁裏沛  
料所美濃國伊自良殿後身一段別拾足院令之  
配之今月中可被惣進之若有難滋後意之族者  
堅可被處罪科之由不レ作中レ仍執違ハ件

寛正六年八月三日 散位之種  
野守貞基

伊勢守殿

右一段別拾足トハ田之反ハ付多目百文之役錢ヲ出ス

室町殿の日記ニ曰 貞丈云け室町日記ハ義晴公以後ノ日記也義  
晴公未レ見リ議耀公時代秀吉ノ以マテラ記シ

タル書ナリ平  
カナノ書ナリ

中間元の木綿二十五疋買取 持般舟渡三ノ上セリ

七厘の賣買ノ事ハ此ノ事ハ

此ノ事ハ此ノ事ハ

此ノ事ハ此ノ事ハ

詞云後十八  
禁書あり  
後十八

一 法局元々より元切米拾貳石よりすしひ百石を御  
越河以迄兵庫の製穀米を御所へ納るに五石の申  
出度と申す新旗郡の米を納るに御所へ納るに五石の申  
出度と申す  
十一月二日  
中間の米穀 二十石五貫五  
林甚五郎  
岡村君名所の取

又山書あり平  
又山書あり平  
佐野君御取  
飯尾君御取  
田君名所の取  
又山書あり平

右ハ天文九年の米也是れ九百年米也とのこと言價  
高ト云へるなり 寛永の米ハ本綿一定六百  
又位ハ米也是れ御取ひ言へる元禄の米一石の代  
替也と云

銀百目本綿一定の代也是れ寛永百文とありは又七八拾  
石の米價也是れ御取ひ言へる元禄の米一石の代  
替也と云  
時代御取ひ言へる元禄の米一石の代  
替也と云  
幾百文古ハ丁百之近代九拾六文を百文とすは寛永  
年中寛永通寶を鑄りてはより始りては細は多し  
は細は多しは細は多しは細は多しは細は多し  
九十六文を  
寛永の米價也是れ御取ひ言へる元禄の米一石の代  
替也と云

一 知り言雨石を御取ひ言へる元禄の米一石の代  
替也と云  
永樂錢の  
太宗皇帝の代永樂九年は鑄りては後之日本











此の語は漢和  
尚の語に  
類する

つら枝はキトを符する有るは未抄にお梅の  
枝はキトを符する有る是れは時々のたゞし  
あるもあれは実にかゝるぬ  
唐土にてハ鷹を志のよきものなり南  
鷹は鷹左常狗とあり又古歌よき鷹のえ  
より老きとさかかひるし  
かゝるも鷹をたゞしえらるし武家  
か江家次才は云たき居鷹右執符  
或説よき家よの老き鷹を志え  
鷹の取もを符するも鷹を志え

然るるとまへ山の物と田の物とかけ括かりし山の  
田の物と田の物とをて田徳といはぬ之山徳と  
意にこれに鷹を志え山の物を志すなり  
奉式之を鷹の志といは難きなり  
田物ありとも山徳といは奉式に田徳といは  
半ハあき意目  
鷹の家兩家あり政頼流  
元祖ハ唐嶋大納言政頼  
祿は神平之古天子の鷹を  
びるも鷹の志を





一 鷹ハ一羽二羽といふも一連二連といふ鷹犬ハ二足  
二足といふも一牙二牙といふ

一 禁野キンヤといハ河内國交野ハ禁野といふ所あり天子の

法將の地也よのつきの殺生を禁野を禁野といふ所あり古惟言親王はあは狩し給ひて金色の三足  
の籠子をほりかきしよりして禁野といふ所あり冷ハその  
里をまづて禁野といふ也

一 鷹のみよりたつた鷹といふ鷹の右あり  
つた鷹といふ鷹の左あり

一 我々のすゝあたなる方ある友方あるといふ鷹のすゝ  
あたなる方ある友方あるといふ鷹のすゝ

一 いたかきといふ鷹のすゝあたなる方ある友方あるといふ鷹のすゝ  
あたなる方ある友方あるといふ鷹のすゝ

一 このすゝあたなる方ある友方あるといふ鷹のすゝ  
あたなる方ある友方あるといふ鷹のすゝ

一 葉せげくあつくしと表裏は色あひたり是を葉せげく  
といふ一説云たもん志ばといふあし年月の立枝をた  
ぐてく旗をたよあげてつる旗をさけてつる











殿中日記記法請  
奉命山田四尺  
奉行方を公  
礼と云山田氏也  
應仁別記云雜學  
船二鯨ト云真  
一尺斗十ルガ飛入  
ケリ疎忽ナル者  
取テ海一投入ケレ  
バ暫有テ鯨一尺  
飛入又云是ヲ  
見レバ鯨鱈ニヒ  
限ラバ尺ト云ク

一、あまの多軍  
陣守あまふ  
くうとハ弓ヲ強  
のきくニハくう  
と云ハ二張の弓  
くとあり是を  
弓杖を亦射の  
りく

鯨サケノかぢりして一尺二尺と云ふあるは大草取古傳アリ  
昔ハ鯨ニ志ありと有り一尺二尺と云ふは此ノ鯨ノ一尺  
ありず一尺以上の魚の大草取をば一尺二尺といふは  
又ハ鯨を一尺二尺といふハ一隻の音をうけて云ふなり  
此ノ後ありは魚の字ハカシメト云ふは一尺といふ  
ハ一ツの魚ハ鯨ノかぢりて一尺といふハ一何れも  
一尺の音をいふは一尺といふハ此ノ後ハ用たりは  
此ノ後ハ魚の字ハカシメト云ふハ鯨ノ一尺とい  
いハ鯨ノ鯨ノ魚ノ別より出ル魚ハカノ國ノ初ノ字ハ  
一、真と一尺二尺といふ魚ハカノ鯨ノ他國ノ一尺とい  
一尺二尺といひてつゝのハ一尺たるハ他國ノ一尺も一尺をうけ  
て一尺二尺といひてつゝのハ一尺たるハ他國ノ一尺も一尺をうけ  
出ル魚あり

一、あまの多軍  
陣守あまふ  
くうとハ弓ヲ強  
のきくニハくう  
と云ハ二張の弓  
くとあり是を  
弓杖を亦射の  
りく

一、あまの多軍  
陣守あまふ  
くうとハ弓ヲ強  
のきくニハくう  
と云ハ二張の弓  
くとあり是を  
弓杖を亦射の  
りく

一、あまの多軍  
陣守あまふ  
くうとハ弓ヲ強  
のきくニハくう  
と云ハ二張の弓  
くとあり是を  
弓杖を亦射の  
りく





一挺二挺と云ふは、何れも亦も毛き物を一挺二挺と云  
 け皆同く心二丁二丁と書け挺の字むづつと書け  
 船にて挺の字の代りな河の字を船の字に用ひし  
 輿<sup>コシ</sup>あはを二丁二丁と云ふ字あると云ふは、  
 一挺あは二人あはと云ふは、一人す一人すを云ひ  
 布<sup>ヌノヤメ</sup>宿あはの敷一延一延と云ふは、又一むつと云ふは  
 いふは字路拾遺物語<sup>卷七</sup>一むつと云ひいでこれあの  
 男<sup>オノ</sup>又と云ふは、畧<sup>中</sup>は布一むつと云ふは、だれが男あはす  
 傳<sup>ムラト</sup>の系得志<sup>ムラト</sup>と云ふは、思ひて云ふ日本記<sup>孝徳天皇</sup>大化二年記 田一町  
 宿一丈四尺延<sup>ムラト</sup>と云ふは、延の字ムラと云ふは、

一 綿<sup>イタイクドシ</sup>敷屯と云屯の字ありむると云心へ軍陣の人数を  
 屯すると云ふも人数を算むを云ふ綿一屯の時ハひと  
 かりと云ふは、倭名抄又唐令云綿六兩<sup>トモ</sup>為屯屯<sup>チト</sup>聚  
 也<sup>トモ</sup>倍<sup>チト</sup>一屯<sup>チト</sup>倍<sup>チト</sup>延<sup>チト</sup>度<sup>チト</sup>屯<sup>チト</sup>遲<sup>チト</sup>  
 一 晝夜の時の敷をおつる日晝の時敷六時之子の時を才一  
 一 乙の時を才二と云ふ、寅の時を才三と云ふ、卯の時を才四  
 一 と云ふ辰の時を才五と云ふ巳の時を才六と云ふ是陽の時  
 一 午の時を才七と云ふ未の時を才八と云ふ申の時を才九と云ふ  
 一 酉の時を才十と云ふ戌の時を才十一と云ふ亥の時を才十二と云ふ  
 一 是陰の時也時の敷をおつるは一時を十の敷又定を

才一の時をバ一さうびぐん残り九つをおへ子時 才二の時  
 をバ二をバおどろて残り八つをおへ巳の時 才三の時をバ  
 三をバおどろて残り七つをおへ卯時 才四の時をバ四をバ  
 おどろて残り六つをおへ辰時 才五の時をバ五をバ  
 六つをバおどろて残り五つをおへ巳時 才六の時をバ六をバ  
 七つをバおどろて残り四つをおへ未時 才七の時をバ七をバ  
 八つをバおどろて残り三つをおへ申時 才八の時をバ八をバ  
 九つをバおどろて残り二つをおへ酉時 才九の時をバ九をバ  
 十つをバおどろて残り一つをおへ戌時 才十の時をバ十をバ  
 十一つをバおどろて残り一つをおへ亥時

言語之部

言語のこゝを意を知りたれば  
 ことごとく心にかたきるあるに記之

何り殿と云殿は官殿の殿して殿殿の多し一の殿殿  
 をあやへる人神ありあやまひて何り殿と云  
 たとへば右神宮八幡字あどの字の字の心へ海人  
 藤枝云於内裏殿ト申ハ執柄家之外不有者ハ  
 関白殿ハ意兼ハ其攝政殿何るヲ申サル、其於ハ  
 お申スニ諸人無異代也親王ヲバ於御前何殿トハ  
 不申也

何り殿の殿上古ハいふ事あるに京於將軍時代也





天子ノ作ヲ書ク  
ル文ヲ以テテ  
頼政ノ書ヲ  
以テテ  
レタルノ未  
見ナリ是古  
風也

このうらのをまうりを具あひせしとおわぬとあれ  
ばうひあひせともいふべきやあれども款合者合終合  
根合ふとの合は終有、故具おわひといふをよしとす  
貴人の食物をあうりは膳おあうり人のいふは終  
初といふは供所といひ多しともいふ方または供  
所とすともいふ也

系といふ詞を今時の貴人より對してはありがごとく云  
り古はあきまひ古は公方極一り系とすは武難書れ  
篇の乾何と依に成下所内書は海頂載先以系存  
又云去月廿八日所教書今月三日玉来畏頂載仕は起以

系存にあらざる云々言あり所内書は所教書も  
方極の由書之それを頂載して系といふは難と  
し初代のあるは貴人へ對して云々系と云  
は初代とすは系もあると云ふはたとは様なきは貴人  
目よかや難とすは事もあは目よの事とすは  
悦ぶ心又悦がき物を悦がしとすは悦ぶ心  
悦ぶ心と悦ぶ心之難と云ふは悦ぶ心  
かこしむると云はかともありは貴人一人の威勢をか  
る心と畏の字をかこしむるともあはるるともいふ

畏入のあぐく云々言古き状あるはむこと時ひき  
 せぐくをかりしむれと云も貴人をおとれつし  
 てせす。心こぼれるとらりなきかりしむれと云  
 是も貴人の作をおとれ傳えむは深知まを云  
 七世ひやを折ると云く産まをわしむるつら  
 かしむる世まると云む貴人をうやまひおとれ  
 産まを云し正座のまをうしむるまをわしむる  
 いしむるつらと云むをないとせり書と云このめと  
 宿世と書しとも家方よはとのめと作らむ  
 為書日をば上見云又書りとも為書日とハ様か  
 三ノカニキ  
 十ヨクニキ

古記ニ荷用ト  
 アリ官仕ノ事也

一 師のよひといひ又師のよひと云はは家仕のよひ也  
 云もは家仕のよひと心けり人あり師のよひと云は  
 師のよひと云は行ては家仕のよひと云は師のよひと云  
 上家方よハ酒を九ん解をかちん味嗜をむし境を  
 志ろ物あぐく云く官あは是名を付てり云くは惠命  
 院僧心の京都將軍時代の人 書並れハ海公深芥と云書よ見たり  
 其以於軍家の女房元もそれを學びて是名を  
 されし云は是名ハ上藤也云記よ見えたり  
 弓射ると云く能く弓を射るとをの字添てハあやう  
 的出張記よ見たり

今時人の兄をあにきといひ伯父ををぢきあぐらう  
何にきこをちきみといふ律をこの字を畧してき古  
か兄君伯父君あぐらうといひしん

あにごあやごおぢこおぢごあぢのぢい所のまじりや  
すいて清と云ふ所ハ清を畧したるにあはあ  
祿はあといふ一説はあれごあぢのぢい所のまじり  
いひあやまうといひあ母はあまはあ娘はあま  
ま同者より有り

又のるを者の人かあやあや人又かああまのまの母の  
を母じや人といひ兄のあを見じや人あといひしんを  
世の人又のるをあやと云はあやや人と云ふのを

又伯仲叔季ト  
云事アリ伯ハ惣領  
ナリ仲ハ二男ノ叔  
ハ三男ニ季ハ四男  
也伯父仲父叔父  
季父ト云モ皆事  
也又ノ三ハシノ身  
ヲ叔父ト云四ハシ  
ノオノ季父ト云  
父ノ兄ヲ伯父ト云  
ヲ也

世の人又のるをあやと云はあやや人と云ふのを  
あやと云ふあり  
おぢのるを伯父叔父といひおぢのるを伯母叔母と云ふ  
係ハあまともむ叔ハおぢともむとされバ父の兄ハ伯父  
又の弟ハ叔父又父のあまハ伯母又のいもハ叔母  
母の兄弟もおぢ目ト近世文盲ある人伯叔の只け  
をあまといひ父方のおぢおぢを伯父伯母と云ハ母  
のおぢおぢを叔父叔母と云ハる人ありあやまといひ  
難合期又不合期あぐらう舊記はあはるあはるありぬ

あやまといひ

アツソク  
― 相忘と日記はあるハ物發しめのたつていふたつていふ

シアハロアシク  
― 仕合悪友の日記はあるハちやうど能くといふ物を志ある

― 世の中のあつぬをいふ不韋の心はいふ

― 難有ゆと日記はあるハ是ハあつていふあるまじいといふ

― 尋之志ト云々トあるハあつていふあつていふの難記を云々

ナシモツタイ  
― 無由神と日記は何ハ物神之今時の詞またいふ

― 少いといふ日記は心はあつても心はあつていふ

― 神といふ日記は

比真といふ日記は川記ハ非真といふハ川の字

― を用るをすといふ非興といふハあつていふ

アツソク  
シアハロアシク  
ナシモツタイ  
比真  
神  
非興

― 心あるあつていふ心は臆病といふ心はあつていふ

― 尋常といふ日記はいふハあつていふ

― 心もいふ日記はあつていふ

― 人のあつていふ日記はあつていふ

― 心も何物といふ日記はあつていふ

― 心もいふ日記はあつていふ

― 心もいふ日記はあつていふ

― 心もいふ日記はあつていふ

― 心もいふ日記はあつていふ

― 心もいふ日記はあつていふ

一人のまゝに於てものよりとらへおやとらへとらへし 抄月か  
どしきいさし出のいどきより出せどこいさるあり  
これらハ人々初を瑞りかかぬるあれども古より地  
風俗の傳りたる多しあやうの事もむつのがれ不審な  
あつ物あき記之今の人の知るるも後ハ知るぬ  
如くありし

コヤツ  
一 故實と云 詞ハ唐土の書より出する事也 史記魯世家に  
云故實故事之是者云々云ハ故實といふハ始の事なり  
云々の事云々と云む也又文選四十六ノ注云故實先王  
之道也云々云ハ故實といふハむづりの天子禹王陽王

文王などの定の並れしをいふと云む日本といふも  
それ方とハ昔神武天皇以来定の事といふを故實  
と云武蔵といハ頼朝依以來幕府將軍などの定の事  
也いふを故實と云むこの法武の事を故實と云む也  
一 祝養といハ祠の事書札の形も云々なり  
一 禄あき人を云々といハ祠近世の祠もあき者よりあり  
鎌倉年中行る正月十七日沙的の事云々是の人村也  
人数の多し祠ハ法合カ勸之と有り又明應二年鎌訪  
左近大夫貞説る格別雅政有云々是之條親候志加  
扶持云々昔知れを記行ふ可し何曾云々云々

故宛行あき人をなほ是といふ料理はあつたことし

二とあること云河日記は有り花飾と書くとは河の初は

結搦といふは同一過職と書くる本はあれどもあやまりと

カッテン

合点といふは書札の款よりある

ニキシヤツ

式正といふは旧記は有り是ハ親式を正す時の事又式と

汁の事同意之式正の時式正の膳式之立文式の大的式

の眉あはるは皆同意之奉式と云心也

頓て又禮と云河日記はいふは有り也ヤカ

と云は同一禮久の事ありと云ふはあり也ヤカ

とみと云河の頓の字をえんと云ふは同一河あり

式ノ眉あはるを四季  
の眉と心はイ  
みよりして作の趣か  
るのあはるにあり  
やまの式の的を  
四季の的と心は  
ありありありあり

はちをこりし河の事と云河弓矢の款は記き

あること云河古ハあき河といはるはこと云あり也

小神のしめみ料七五三の膳款吸軒のあつあり

さ帯下げ帯かきさかきさかきさかきさ

芳はきぬ色はきぬ色はきぬ色はきぬ色はきぬ

河皆本式もあはるはあり也と云ふを付してあり

これらハ皆今世の河といはるはあり也

花を折ると云河ハ人の衣裳あどの袴そ外出立のあり

さゆをそあやふはあり也

行列新調ハ花を折ておさすなりと有り又一葉

良の尺素從來の面々此立可也折花は中兼及はあり  
 東鑑卷世嘉禎三年二月二日ノ条ハ所出候又殊被刷  
 供奉人清撰各行粧殊折花太平記卷三主上笠置  
 法没落条云同十三日ハ新帝登極のよしにて長持堂  
 よりだつり入らせ給ふ供奉の法ハ花をおて行振引つゝ  
 雜事新役新用ありの雜の字をくわくともいへば  
 と書てもくさくともいへば雜の字のむくともいへば  
 とも江戸の初ハいこぶくともいへば又とぶくともいへば  
 ともいへば  
 キヨイ  
 所意を得りともいへば人のあつり入料等を得りともいへば

古き状の案文は披を状の書とのあらはけり意は  
 少く文意あり是の向の奏者ハ心をこめて披を  
 頼といふはしては意をばけりけり云へば意は  
 云ふはあはれと母ハ夫人の所初をば意と心けりハ  
 あはれりといは意ハけり云へば夫人の所初を古の  
 といひて上意といふもその方のけり云へば作の  
 人唐記ハたゞだの所行ハと云ふはたゞと云ふはた  
 け老のりハ大久保彦を忠教が家記也

東照宮御立腹ありてたゞと云ふは作ありと云へば  
 尊りの御節用集田代田代齋齋物ハ人撰齋者  
 齋田代  
 雜記十五  
 世五





食入食物を調ふる食物を取捨つるの事

ゆへに食物を料理する事食入を料理する

食入を料理する事食入を料理する

拘惜と云はれ古書より

此項をきく事あり

押留と云はれ古書より

古書より

字也

す

す

ワビと云はれ古き書あり

此中次と云はれ

此中次と云はれ

此中次と云はれ

室町時代の詞

支遣と云はれ

叙用と云はれ

此時の事

荷用と云はれ

参賀と云はれ

一 されいさしたまはぐれりていさしき物なればいささ  
 目しされさるるあざき初孫氏物語外古書あり  
 一 ぞげいさか舎人といひ枕草紙ありいささ  
 されいさりたるをさし抄物はさるる  
 一 園クダのさるる古書は孔子クジと書らるるあり又定家公の明月記  
 一 ありさり又定家記より園と書らるるあり  
 孔子といはるる園のさるるはさるる書はさるる  
 一 ず不審ありいささは是を記し書らるるあり  
 一 白状といはるる書はの部は記し書らるるあり  
 一 陳チといはるる書はの部は記し書らるるあり

源氏物語の宴  
 の巻はいさしき  
 あるいさしき又これを  
 つくしの巻は余  
 ことかふひか  
 んへいさのあれ  
 又あさきの巻  
 といさしき  
 あんへいさ又あ  
 幸の巻はいさしき  
 ありあへいさ  
 又いさしき

一 におりるをいさしきのさるる陳といはるる書は  
 一 能きさるるにいさしきさるるさるるを陳といはるる  
 一 悪きをいさしきさるるさるる事  
 一 あやさるといさしきあやさるるをいさしき付は我悪きを悔  
 一 て教先をいさしきあやさるといさしき非  
 一 何といさしき行くべいあざきいさしきの初は源氏物語枕草  
 一 紙といさしき古書はあり今も田舎といはるるいさしき詞ありいさしき  
 一 倉といさしき可の字はキといはるる通じありいさしきさるるいさしき  
 一 一也江戸の人と田舎者のいさしき詞を笑ふいさしき  
 一 お志といはるる作ありの畧語いさしきお志といはるるいさしき



寺と云々寺よざけおありしおのまるとして  
元興寺の鬼とみし  
すのあ 濫りええり

待るとのつひの候と云と目し相入  
あまあま  
あまあま

見奈と云人のあつ集りて對面せり  
又物を入

の見するものをも見えあふ入るる云古の相入  
げんごら  
同相入

種管と云りて古書にけいめあふもあつり  
原氏物語  
アれいさ

のたふ種管といふ事をもあむむ  
いふむむ  
いふむむ

さんざららるる云相ハ老也ややうとせしむる相  
いふむむ

如法と云い尋ねると云は目し別は別り  
いふむむ

を云無法は對して如法と云へ無法の法日をむきたる  
いふむむ

意外と云いあめんまのりの不と後と思ひの外といふ相  
いふむむ

と云江戸と云無礼のものを意外といふハおあり  
いふむむ

一 意心と云い又字の通うと云ふきこむ心のあはれ  
いふむむ

云ハ遠慮もあつ人のおをよゆと云ふをさへと對人の物  
いふむむ

そいひゆむをさむむむむむむむむむむむむむむ  
いふむむ

キヤクツ  
いふむむ

一 計會と云相古書に何り計會と書くもつりひあ  
いふむむ

出るとよむし何よりよむともあ品のり彼と云といひ  
いふむむ

合せるとめくと云はあちあひるをさへ  
いふむむ

たの色ともおのとも云ハ我々のるこを江戸の相  
いふむむ

うぬと云ハおのと云相のあやまつてうぬれと云相  
いふむむ

和漢朗詠集の  
待は今日不知  
誰計會春風  
春水一時未と  
白居易が待也  
春風と春水  
ケタカ一時来る  
水云一時来る  
ハ誰が計ひを  
一時は風と水と  
會合せるやふ



あはれと云ふは又あはれと云ふはさるる事と云ふは遊ば

びたふと云ふはさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

さるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは遊ばさるる事と云ふは

初は努力の二字を朝の努力といふ力をよく張つていふも  
もろくも力に字は力を入て心をゆるむるに努  
力の二字をとりてと云はれ又心を用いたるこゝろに

和歌のなかにあつた材料の巻だといふ  
あつたといふ朝の朝の字を清の字を用ひて  
未熟はあつたをいふといふ

尾の字の音字を音とていふといふ  
かゝる字の朝の朝といふといふ

の字の音字を音とていふといふ  
かゝる字の朝の朝といふといふ

昔の老学菴が筆記に曰く人見人物之可憐者

則曰鳩呼字景鳥見異則噪故以為鳥呼歎所

異地也又蓋囊抄應神天皇の御装束の裾と云はれ

尾の字の引き括弧を戸の間は事いへし村尾は物と

物ありしよりいへし海路といふ用もまた日本紀ま

え元ざるゆへに應神天皇の御討語は事いへし

昔の俗語よおの抱抱の字を支彦と云古書も元

たり支はてしといふもむ字に人の字偏あり討語を

出してありといふ人の詞をさへいふより出る詞に

あり詞の情用あり

一 辰をひるといふを古代ハあつたといひし之古今も

集字拾遺物語の於古き物語はありけり  
しりしを是より今世女の詞はありき  
あり又源頼朝如名抄に放屁如名信は流し何り  
是本の詞也

一 陰莖インキマツをまらと云ふ近世の俗語はありけり古代より

名に古字若葉開葉古事談字拾遺物語ホの古き  
書にまらとあり源頼朝如名抄莖垂類の類は玉莖  
の二字を出して如名抄に出す源平馬評の条は陰脈の  
二字を出して如名抄に麻良性を是あり如名抄の時代も  
はまらと云ふ又今世の女はまらのみをへんこと云はれ

和名抄の陰囊インナクの二字を俗に布久利フクリと記し陰核の

二字をバ倍ハノコと記し古に陰核ハヒの世に云  
まら海の中のよりと云ふ古の古の事

しりしを是れは海の中の事なること云はれ稱遠トハと云  
らの名もはありけり

順川村上天皇の比代天曆年中の人と云ふ後卷の二  
保延五年四月廿五日郡馬郡走り還テ引落敷頼冠

鞆不殘二物剥取其装束又車等同取之追殺致  
頼拘其摩良走入小屋等又古今若葉開葉

又取當たる摩良もけられけり又云一生不犯の

尼於終の時入念佛を勧めれども念佛せざりて摩  
良ううめくし唱あうり死る家あふ

一人の女を問ひ初め夫は不修操嫌能といひ上掌

ふは此東健きのひを以ては腰膝といひ等々

法堅固といひ下輩ふは此を平木といひて上中下の

身をかゝりて古代より此を以て是の世の凡俗は

忍のめくはる何者の始に定りてある死に審

一 入眼ニラガンと云ふは古来の物事の成物志を以て入

眼と云ふは是の画工の筆を以て身中の洞と形を

獸等を画ぐ可し眼の身は眼を以てせしむる形を

いとしく終て後は眼中は眸子を入於之又木偶念

をも眼を作り彩色終を眸子を入るし併像は眸子

を入於再眼と云ふ是又入眼といれりある不唯

物事の成物志を以て入眼と云ふ

一 濫吹ランソウといふはみづかに信をいふ事なり書言故事十卷抄本よる

一 香カウを嗅カぶるを香を嗅くといふ是のあはれあり

かぐといふも残りいふは初めは何れも深き物信極元の

一 合タキせの糸タキ云わうといふはまじきつゝむらりるを

多めれ入るのむらり合せぬひつるものさあはれをかき

一 あひせぬアヒるはけりあることおわりのさき香をかぐ



此書係因... 藏書...



三才圖會  
此書係因... 藏書...

